

KOSUGE SHUGEN SITE

小菅修験遺跡2002



2003. 3

長野県飯山市教育委員会
長野県飯山建設事務所

KOSUGE SHUGEN SITE

小菅修験遺跡2002

2003. 3

長野県飯山市教育委員会
長野県飯山建設事務所

例 言

- 1 本書は、長野県飯山市大字瑞穂字間久保6523番地ほかに所在する小菅修験遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、県過疎地域代行道路建設事業に伴い、長野県飯山建設事務所の依頼により、飯山市教育委員会が、平成14年6月4日から同年7月23日（補遺調査～8月20日）まで実施した。
- 3 本調査体制は次のとおりである。
委託者 長野県（長野県飯山建設事務所長 中澤伯夫）
受託者 飯山市 飯山市長 小山 邦武（～平成14年9月15日）
木内 正勝（平成14年9月16日～）
- 4 発掘調査から報告書作成において、次の機関・方々よりご指導・ご教授を得た。記して感謝申し上げます。
長野県飯山建設事務所・（株）みすず総合コンサルタント・小菅区（吉原年一区长）
- 5 本書作成は、高橋桂調査団長指導のもと調査員の岡田良幸が主体となりとりまとめた。遺物洗浄・注記は小林正子が、実測・トレースは藤沢和枝が行った。文責は目次に記した。
- 6 発掘調査の図面・データー、出土遺物は飯山市埋蔵文化財センター（電話0269-65-3993）で保管している。

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	望月静雄	1
第1節 地理的位置		1
第2節 歴史的環境		1
第2章 発掘調査の経緯	望月静雄	5
第1節 発掘に至る経緯		5
第2節 発掘調査の組織		5
第3章 発掘調査		7
第1節 発掘調査の方法と経緯	岡田良幸	7
1 調査方法		7
(1) 調査地点		7
(2) 調査区の設定		7
(3) 調査方法		7
2 調査経緯		7
(1) 発掘調査		7
(2) 整理作業		11
(3) 調査日誌抄		11
第2節 遺 構	岡田良幸	13
1 遺構全体		13
2 石積遺構		24
3 掘立柱建物址		24
(1) 1号掘立柱建物址		24
(2) 2号掘立柱建物址		24
4 集石遺構		26
(1) 集石遺構1		26
(2) 集石遺構2		26
第3節 遺 物	望月静雄	32
1 土器・陶磁器		32
(1) 珠洲陶器		32
(2) 土 器		32
(3) 陶 磁 器		35
2 その他の遺物		32
(1) 鉄 製 品		35
(2) 銅 製 品		35
(3) 石 製 品		35
(4) 銭 貨		35
第4章 ま と め	望月静雄	36

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的位置

小菅修験遺跡は、長野県飯山市大字瑞穂に位置し、現在の小菅集落と範囲がほぼ一致している。昭和29年の町村合併で飯山市となったが、それ以前は下高井郡瑞穂村である。

飯山盆地は、東西約6km、南北約15kmの紡錘形の小盆地である。盆地西縁は、黒岩山(938.6m)、鍋倉山(1288.8m)等比較的低い関田山脈(東頸城丘陵)によって画されている。ここには越後に通ずるいくつかの峠道が知られている。一方、盆地東縁は毛無山(1649.8m)等三国山脈の支脈によって、また断層構造線に沿って急峻な山地で画されている。飯山市瑞穂地区は、盆地東縁の山麓および千曲川河岸に面した段丘・丘陵上に位置している。

小菅集落は、千曲川河岸より約150mから200m高位にあり、発達した扇状地上に立地し、西の盆地底に向けて広がりを見せる。集落東上方は、幅約750mの西に開いた馬蹄形の崩壊凹地が認められ、重要文化小菅神社奥社本殿もこの中に位置している。

すなわち、東側は毛無山に至る急峻な山地で、南北をその支脈によりそれぞれ画され、西側に唯一開口した地形を呈している。したがって、飯山盆地のやや東側を流れる千曲川を眼下に眺め、遠く西側の関田山脈やさらにその西に聳える妙高山は、関田山脈の上に突き出た状態で真正面に眺めることができる。

小菅に至る道筋は、旧下水内郡である飯山市常盤から千曲川を渡り関沢の第二の鳥居をくぐり、急峻な参道を登って追分・西大門(仁王門)に至る街道のほか、南からは神戸から風切峠を登って桂清水に至る南口、及び現野沢温泉村前坂から登り、北竜湖東側を通ってコエンドを越えて小菅に至る北口の三ヶ所の道筋がある。

第2節 歴史的環境

小菅修験遺跡は、現在の小菅神社が元隆寺あるいは小菅寺と呼ばれていた中世頃最も栄えた修験場であり、平安時代の末には戸隠・飯綱などとなりて北信濃の修験の霊場となっていたといわれる。その起源は、天文11年(1542)5月に別当と衆徒中によって記録された「信濃国 井郡小菅山八所権現並元隆寺来由記」、慶長5年(1600)5月に別当大聖院澄舜が記した「信州高井郡小菅山元隆寺縁起」によると、「役小角(役行者)がこの地に来り、深谷の美と神木霊草に心を打たれていたところ、飯綱明神が現れて、当地は古仏練行、諸神集合の地であるから仏法を広めるようにと奨められた。そこで行者は東嶺の岩窟で祈誓していたところ、小菅権現が現れ「われは摩多羅神すなわち馬頭観音の化身である。仏法を擁護しよう」と告げた。行者はそこで小菅権現を主神とし、戸隠・熊野・金峰・白山・立山・山王・走湯の神々を勧請して八所の権現を祀った」(飯山市誌上巻)。

その後元隆寺を興し、金堂・講堂・舞台・三重塔・梵神堂・鐘樓・仁王門、さらには里社を建立

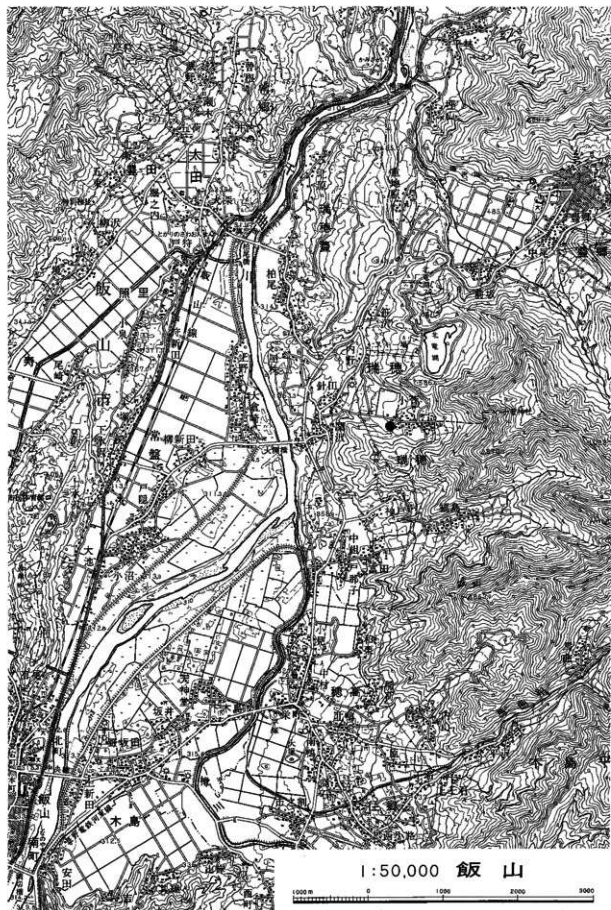


圖1 小菅修験道遺跡位置圖

したと伝えられる。

中世には小菅山元隆寺として、衆徒の僧房は上の院16坊、中の院10坊、下の院11坊とそれを総括する大聖院と末院10、盛時には僧侶、修験者、楽人等300人を越し広社優美を極めたという。応永13(1406)年に製作されたと考えられる板絵著色観音三十三身図は、大塔合戦が終息、国内も安定し小菅の地も修験道の最盛期を迎えた頃のものである。また、元隆寺由来記は天文11(1542)年に成り、奥社建立は天文15(1546)年の製作で、奥社本殿の再建も天文年中になされており、甲越の戦いが始まる前のこの時期までが小菅山がもっとも平穏だった頃と考えられる。

甲越の戦い(川中島合戦)は、天文22(1553)年頃より始まった。弘治3(1557)年、長尾景虎(上杉謙信)が元隆寺に戦勝祈願の願文を奉納している。そして、もっとも激しく戦ったとされる第4回川中島合戦(永禄4年=1561)の余波により、小菅山は奥院を残し灰燼に帰したという。

時代が降り武田・織田氏が滅び、小菅荘が再び上杉景勝の所領となるに及び、天正19(1591)年に別当大聖院ならびに18坊が願主となり、奥社本殿が修復されている。したがって、永禄4年以降この頃までに大聖院や多くの坊が再興されたと考えられる。宝物である寄進された鬻口(文禄2年1593)はこの天正12年の奥社本殿の再興を祝したものと推定されている。

このように再興しつつあったが、慶長3(1598)年景勝の会津転封により別当も移ったために頓挫したという。

近世に入り、歴代城主の崇敬のもとに修理等が行われ、特に松平氏は、奥社や里社、講堂・大鳥居などを修復・建立している。その後幕府領になったが、飯山藩主本多氏は毎年初20俵と杉苗一万本を寄進している。なお、近世の文化財としては、皆川廣照・廣泰寄進の絵馬「黒神馬・白神馬」や「花鳥之図」、菩提院の「十六善神画像」・「涅槃・極楽・地獄絵図」などがある。

明治2(1869)年の神仏分離の政令により、小菅山元隆寺は「小菅社八所大神」と改称し、明治33年5月以来小菅神社として今日に至っている。

このような大きな流れの中で小菅神社は変遷してきたが、その実態はほとんどわかっていないのが現状である。その意味で、今回の発掘調査は小菅神域の周辺部の調査であり大きな意義がある。

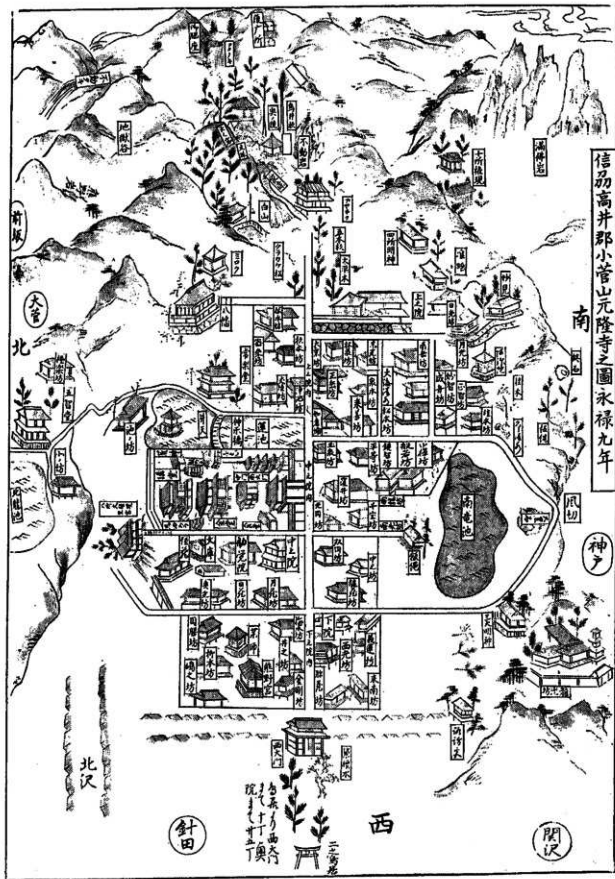


图2 小菅山元隆寺絵図（長野県町村誌より）

第2章 発掘調査の経緯

第1節 発掘に至る経緯

小菅修験遺跡の保護協議については、平成12年に市建設部建設課より照会があり、教育委員会事務局と協議が行われた。市教育委員会では小菅集落の範囲全体を「小菅修験遺跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地として認定しており、当該地はその範囲内及びその周辺部であった。そのため、特に公共事業の場合は慎重を期して事前に発掘調査を実施することとして、工事主体者の長野県飯山建設事務所とも協議が成立した。

平成14年1月、飯山建設事務所よりあらためて「平成14年度以降に実施予定の公共事業等一覧」の提出があった。その中に国補過疎代行小菅地区があり、平成14年4月から平成16年12月までの予定で、約18,000㎡の工事面積で行なうこととされていた。

平成14年4月10日、長野県飯山建設事務所建設課・用地課・管理計画課担当職員並びに飯山市建設部建設課担当者として飯山建設事務所において、発掘に伴う詳細な協議を行なった。その結果、該当箇所の工事は来年度予定であるが、用地は買取済みなので発掘調査は、500㎡以上、14年度で実施することとする。時期は市教委案のとおり6月・7月を予定とする。調査の完結は平成15年3月とする。また、費用についても協議がなされ合意された。

同年4月30日 飯山建設事務所長名により、「土木工事等のための埋蔵文化財発掘調査の通知書」が提出された。

同年5月1日 長野教育事務所長宛前記通知書を、市教委の意見書を付して提出する。

同年5月20日 長野県教育委員会教育長より飯山建設事務所宛「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知がある。（工事着手前に記録作成のための発掘調査の実施）

同年5月27日 長野県飯山建設事務所中澤伯夫所長と飯山市小山邦武市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」書が締結される。

第2節 発掘調査の組織

平成14年度

調査団長	高橋 桂（飯山市文化財保護審議会長）
調査担当者	望月 静雄（飯山市教育委員会事務局）
調査員	岡田 良幸（下高井郡木島平村）
〃	伊藤 彰美（下高井郡木島平村）
作業員	岩井伸夫・小林亮・真島基高・小林清和・市村文昌・山岸義和・真島今朝義・真島一男・蒲原良典・小林収高・丸山重守・吉原傳・山岸捨和・シルバー人材

派遣（高橋喜久治・万場義秋・宮本鈴子・阿部智子）

事務局	清水 長雄	飯山市教育長
	市川 和夫	飯山市教育次長
	米持 五郎	飯山市教育委員会生涯学習課長
	丸山 一男	飯山市教育委員会生涯学習課長補佐
	望月 静雄	飯山市教育委員会生涯学習課文化財係長
	山本伊都子	飯山市教育委員会生涯学習課文化財係（～1月）
	藤沢 和枝	飯山市埋蔵文化財センター
	出沢まどか	飯山市教育委員会生涯学習課文化財係（2月～）

第3章 発掘調査

第1節 発掘調査の方法と経緯

1 調査方法

(1) 調査地点 (図3)

調査対象地は小菅地区入口の、道路新設予定地で現在は水田と畑地になっている所。

(2) 調査区の設定 (図4・5)

調査区内のグリッド設定は、道路工専用杭 I P 8・SP 8 を用いる。そこを基準に 4 m 方眼を設定し、南北に南から 1・2・3……28 まで、東西に東から A・B・C……H までと呼称することとした。

レベルは工専用ベンチマークを基準とした。BM 8 = 474.679 m

(3) 調査方法

調査方法は水田部分では、スコップとジョレンにより表土（耕作土）部分を除去し、床土から下はジョレン、移植ゴテ等で慎重に掘り下げて、遺物・遺構を検出していった。畑部分では表土（耕作土）からジョレン、移植ゴテ等で慎重に掘り下げて、遺物・遺構を検出していった。遺構図は、基本的に40分の1の平板図を作成し、遺構検出に応じてより細かい作図、レベルの記録作成を行った。写真は全体、部分と出土状態等に応じて適宜に撮影した。

2 調査経緯

(1) 発掘調査

今回の発掘対象となった遺跡は、小菅修験遺跡である。発掘対象面積は1,474㎡、調査期間を6月から7月までの2ヶ月間を予定した。

以下発掘調査の概要を示す。

小菅修験遺跡

所在地	飯山市大字瑞穂字間久保6523番地ほか
調査期日	2002年（平成14年）6月6日～7月23日
調査面積	960㎡
調査結果	掘立柱建物址、集石遺構、石積遺構、土器、陶器、鉄製品、銭貨、石製品ほか

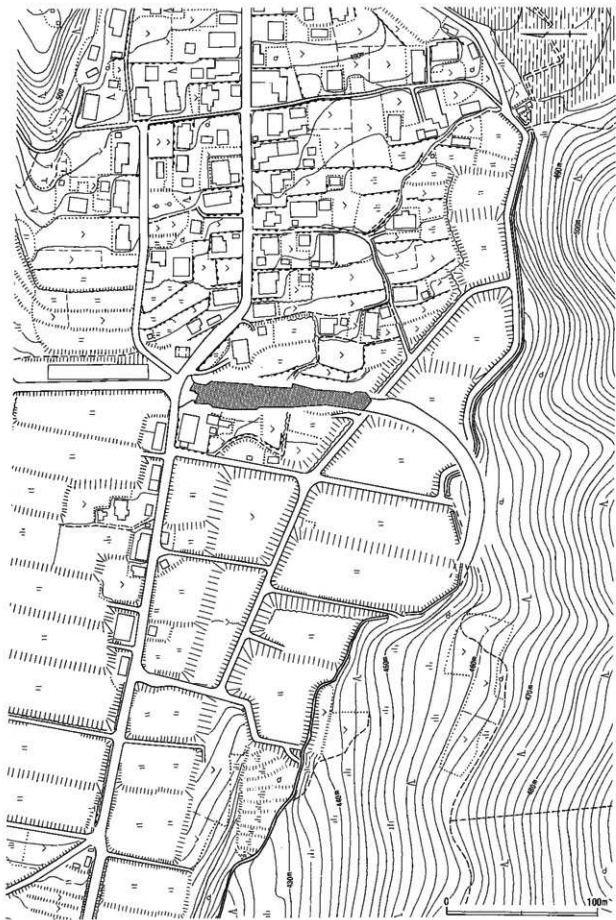


图3 调查区周边地形图 1:2,500

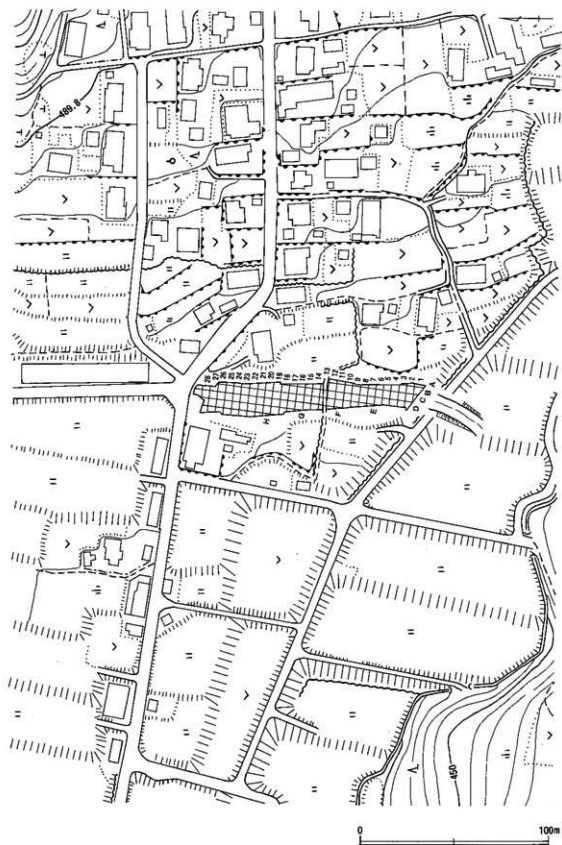


图4 調査区グリット図 1 : 2,000

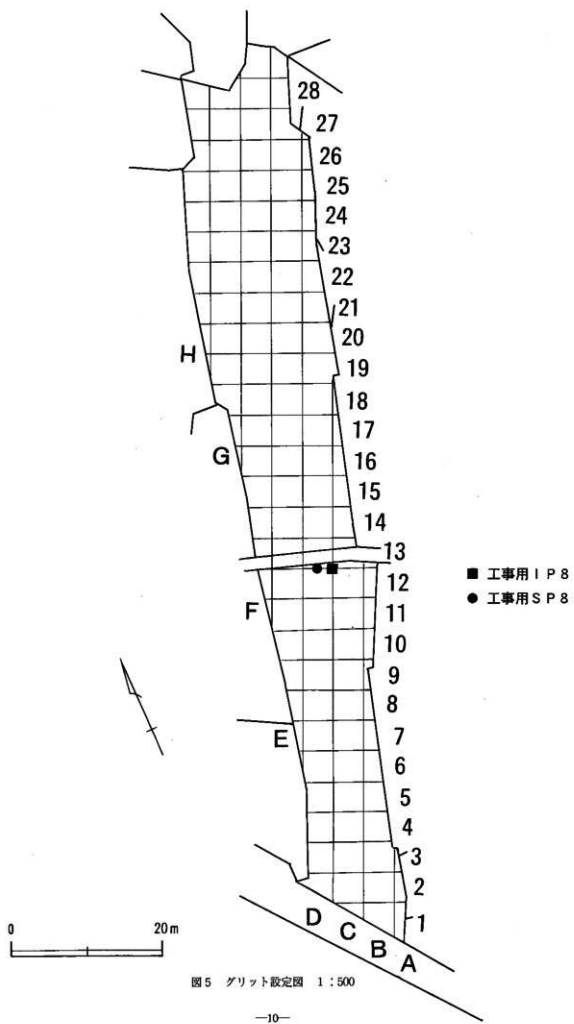


図5 グリット設定図 1:500

(2) 整理作業

整理作業は8月20日より、旧第三中学校寄宿舎で行った。整理手順は、遺物の洗浄・注記・接合・実測・トレース・写真撮影、図面整理などを行う。

(3) 調査日誌抄

2002年（平成14年）

- 6月3日（月） 器材搬入、テント設置。
- 6月4日（火）～5日（水） グリット杭打等発掘準備。
- 6月6日（木） 小菅修験遺跡発掘調査開始式を現地で行う。引き続きE・F-13・14、D-3～5まで表土（耕作土）除去。
- 6月7日（金） D-3～6石積確認しながら作業続行、E-13でトレンチ、B・C-3で表土（耕作土）除去。
- 6月10日（月）～12日（水） C-10～15まで石積確認しながら精査、E・F-13・14、C-5・6ジョレンがけ精査、D-16～18石積確認しながら精査。
- 6月13日（木）～14日（金） D-8～12ジョレンがけ精査、石積遺構測量。
- 6月17日（月） D-7～9精査、石積遺構測量。
- 6月18日（火） D-14・15表土（耕作土）除去、C・D-8～12、B-5～8表土（耕作土）除去。雨のため午後作業中止。
- 6月19日（水） C-8・9、D-14・15ジョレンがけ精査、G-19・20表土（耕作土）除去。
- 6月20日（木） D-9・14～15精査、C-4～7精査、石積遺構測量。
- 6月21日（金） C-4～7、D-9・14・15、E-14、G-19・20、H-22精査、石積遺構測量。
- 6月24日（月） C-3～5平板測量、D-8柱穴より銭貨検出。引き続き作業続行。
- 6月25日（火） 雨のため作業中止。
- 6月26日（水） 作業続行。H-23・24表土（耕作土）除去、F・G-25精査、石積確認。D-11土器検出。B・C-4～8平板測量。
- 6月27日（木） 雨のため作業中止。
- 6月28日（金） C・D-10精査、H-23・24表土（耕作土）除去、F・G-28精査、石積確認。E-23・24精査、石積確認。C-8～9平板測量。
- 7月1日（月） 雨のため作業中止。
- 7月2日（火） 雨のため作業中止。
- 7月3日（水） D通り法面、北面草刈り。雨のため作業は午前中で中止。
- 7月4日（木） 作業続行、F・G-26～28表土（耕作土）除去。D・E-15～16平板測量。
- 7月5日（金） G-19精査、作業続行。E-14～15平板測量。
- 7月8日（月） G・H-19集石遺構確認、H-26・27精査、作業続行。
- 7月9日（火） G-22・23表土（耕作土）除去、H-26・27精査、土器検出、作業続行。
- 7月10日（水） 雨のため作業中止。

- 7月11日(木) E-20~21・23、F-22~24・26~28、G-18・21~22表土(耕作土)除去。
- 7月12日(金) E-19~22、F-22・27~28、G-18・21~22、H-27精査。石積写真撮影。
- 7月15日(月) 作業続行。雨のため午前中にて作業中止。
- 7月16日(火) 雨のため作業中止。
- 7月17日(水) F-19・20表土(耕作土)除去。作業続行。
- 7月18日(木) 作業続行。E-19~22、F-19~24精査。
- 7月19日(金) 作業続行。
- 7月22日(月) 平板測量。
- 7月23日(火) 現場資材撤収搬出。午前中にて作業終了。
- 7月29日(月)~31日(水) 平板測量。
- 8月1日(木)・5日(月) 平板測量。

第2節 遺 構

1 遺構全体 (図6)

A-C-3~9 (図7) 石積遺構の東側1段高い所である。表上より30~40cm掘り下げると礫が多く混じる茶褐色土層で遺構は確認できなかった。中程にある柱穴状のピット2基は、石を抜いた跡と思われる。北側へ行くほど落ち込んでいる。(図11)

遺物は、C-7にて珠洲陶器の小破片2点、釘と思われる鉄製品2点が出土している。

C・D-3~12 石積遺構の西側、掘立柱建物址以外では、D-8において表上より20cmほど掘り下げた黄褐色土層面より柱穴を検出。30~40cmの方形で、深さが9~55cmの柱穴が4ヶ所。直径が25~80cm、深さが18~42cmの円形の柱穴が8ヶ所。その内P₇の方形の柱穴より銭貨3枚が出土。(図20)

D-9ではSB2以外に、35cmの方形で深さ35cmの柱穴1ヶ所。直径22~35cm深さ8~36cmの円形の柱穴5ヶ所。SB2以外の柱穴は不規則にあるため不明である。

遺物は、SB2の北側黒色土層中において、土器片1点、砥石と思われる石製品1点、釘と思われる鉄製品1点が出土している。

13通りに水路がある。東から西へと流れている。水路幅は、30~40cmで深さは50~75cmである。水路の両側ともしっかりとした石積である。水路に面して北側には水田管理用の40~50cmの道がある。

遺物は、水路の南側11・12通りにて珠洲焼小破片5点、土器片1点出土している。

D-15表上より30cmほど掘り下げた、石が多い黄褐色土層中において柱穴を検出、P₁~P₄。20cmと50cmの方形、深さ9~24cmの2ヶ所。直径20cmと40cmの深さ6~11cmの円形2ヶ所。

E-15表上より30cmほど掘り下げた、石が多い黄褐色土層中で柱穴を検出、P₁~P₂。40×65cmの楕円形、深さ18cm。直径20cm深さ10cmをそれぞれ計る。

遺物は、珠洲陶器破片1点出土している。

E-16表上より18~30cmほど掘り下げた、石が多い黄褐色土層中で柱穴を検出、P₁~P₁₀。20~25cmの方形で、深さ5~15cmの3ヶ所。直径15~30cm、深さ3~20cmの円形4ヶ所。15×35cm、18×40cm、25×65cmの楕円形、深さ10~15cmの3ヶ所。この調査区のそれぞれの柱穴と思われる所は、不規則な並びのため不明である。(図13)

集石遺構の東南には水路があるが、この水路は簡単な石積である。幅は20~45cm深さは14~22cmで東から西へと流れている。水路の北側の調査区は、45~50cm掘り下げた茶褐色層中において柱穴を検出。直径16~24cm深さ14~26cmの円形5ヶ所、ここの柱穴も不規則のため不明。

集石遺構の北側に広がる調査区は、北から南へのなだらかな斜面である。その中間地点の22通りにて表上より20~40cm掘り下げた、茶褐色土層中より柱穴を検出。直径20~32cm深さ2~46cm円形9ヶ所。21通りには直径15~30cm深さ10cmの円形3ヶ所。それぞれの柱穴は不規則な並びのため不明である。この調査区の東側と北側にはそれぞれ石積がなされている。東側の石積は、高さ47~

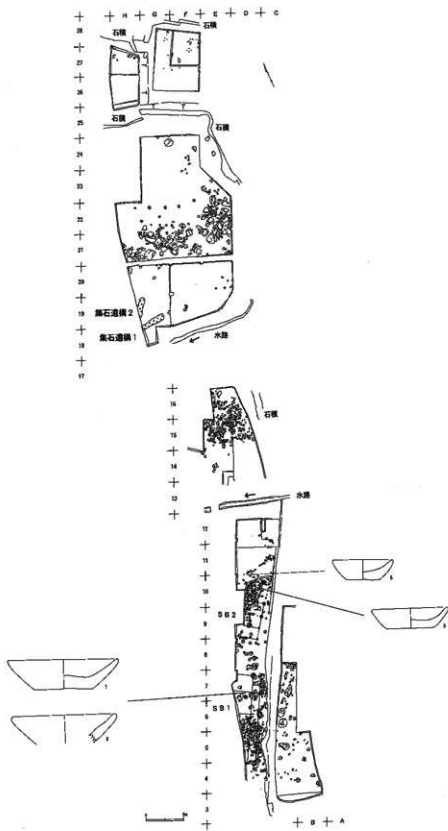


图6 遺構全体図 1:500 土器は1/4

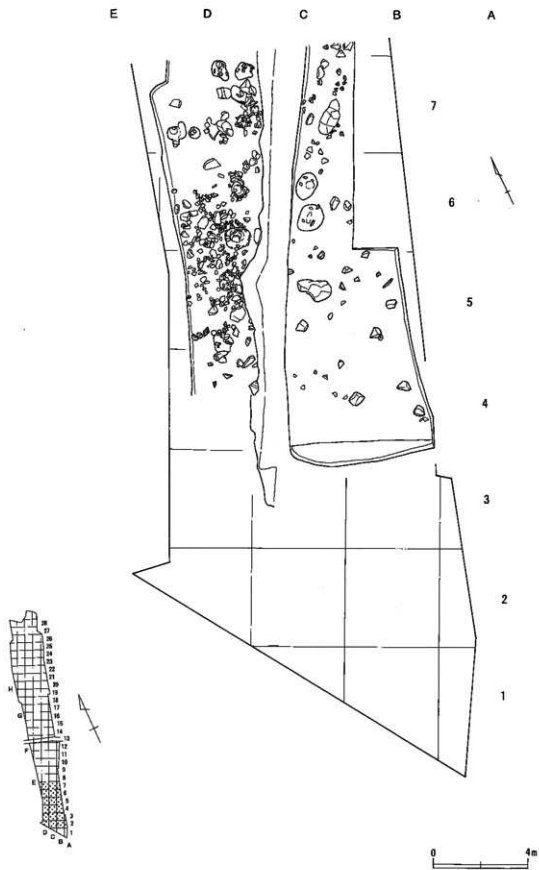


図7 遺構図(1) 1 : 160



图8 遺構図(2) 1:160

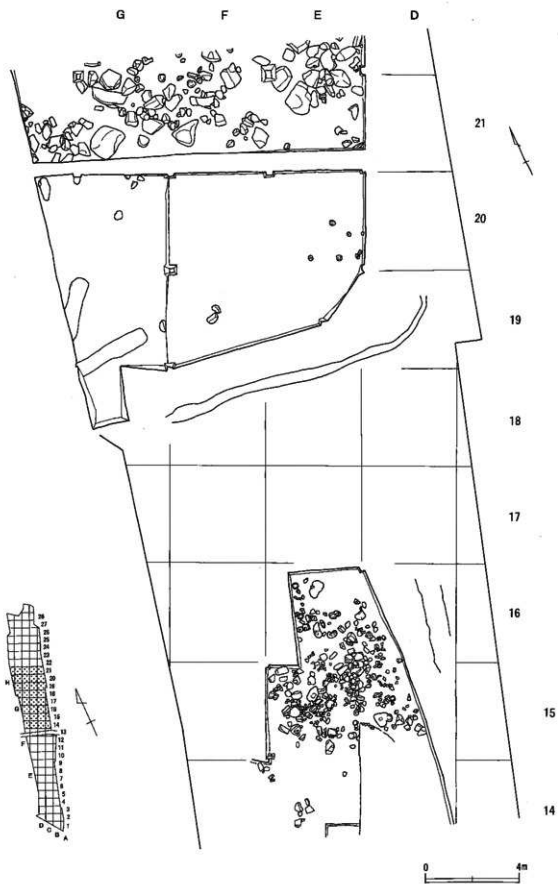


图9 遺構図(3) 1 : 160



图10 遺構図(4) 1:160

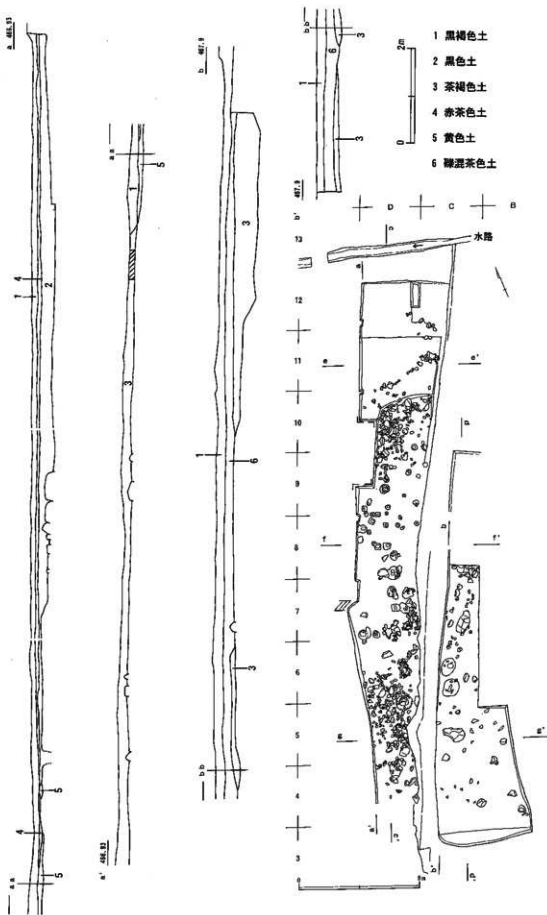


圖11 遺構実測図(1) 1:80 (1:250)

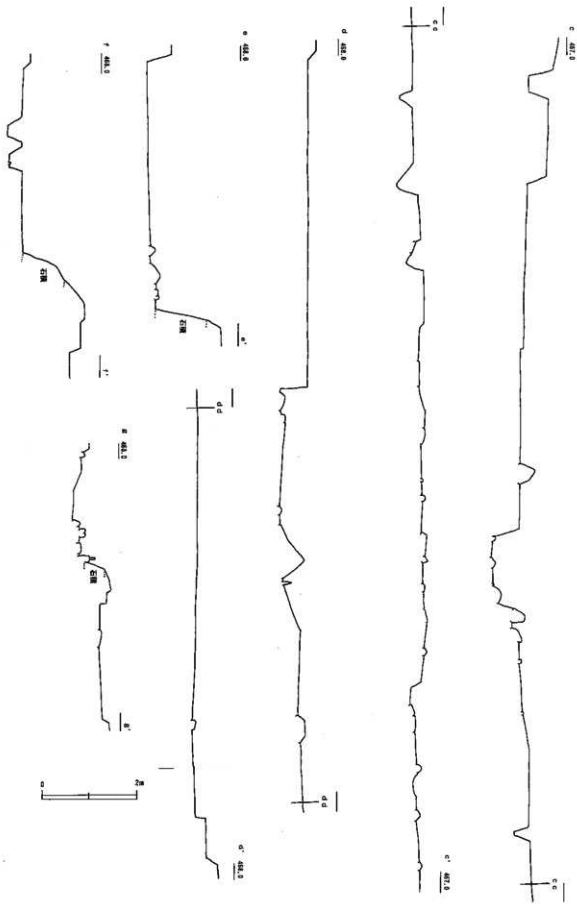


图12 遗構実測图(2) 1:80

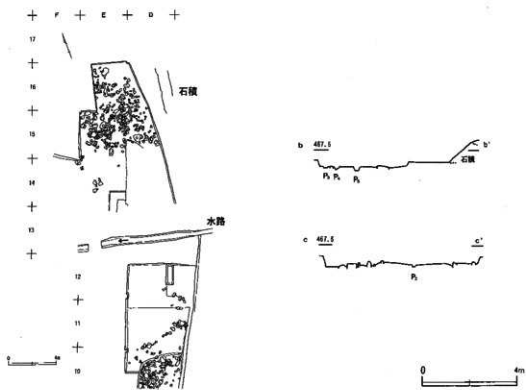
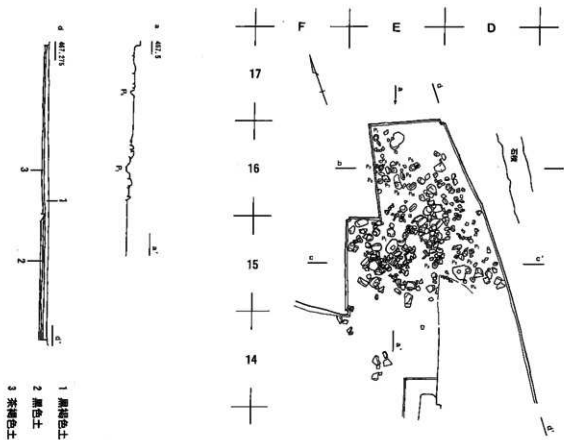


图13 遺構実測図 1:160 (1:320)

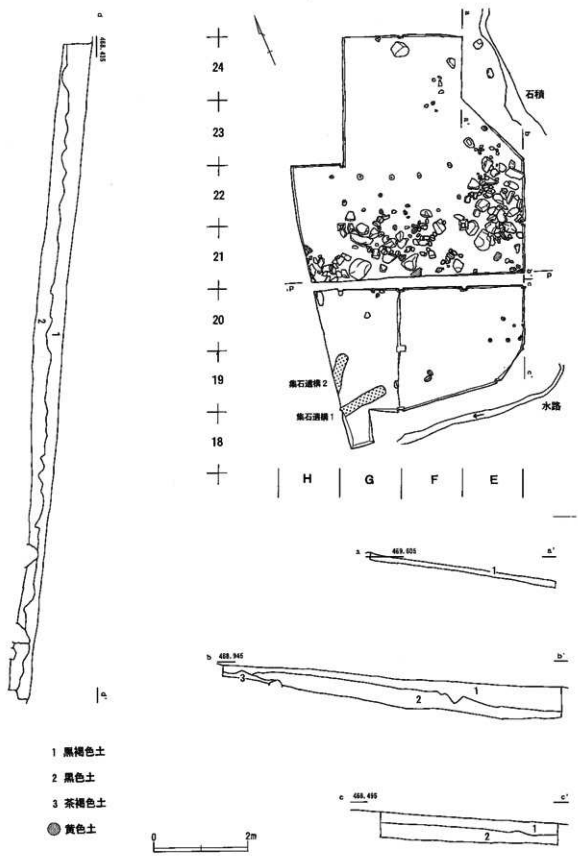


图14 遺構実測図 1:80 (1:250)

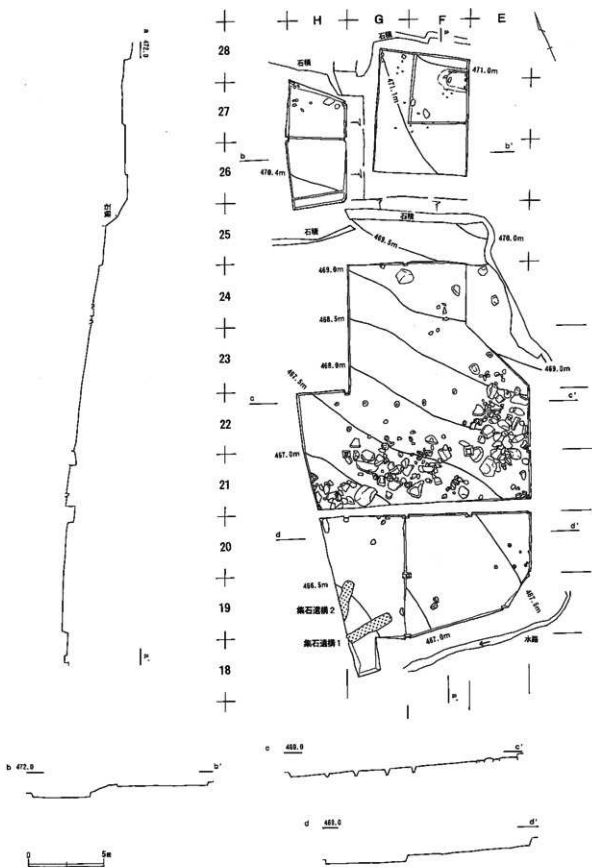


图15 遺構実測図 1:250

119cm長さ10mほどである。直径30～50cmの石を3段から4段積んであるが、上部が崩壊している。北側の石積は、ほとんど崩壊しているが長さ9m高さ47～100cmと思われる。

遺物は、珠洲陶器破片4点、土器片1点出土している。

調査区が一番北西側、H-26は表上より21cm掘り下げた所で茶色土層となる。H-27は表上より37cm掘り下げた所で、茶褐色土になる。この区域では遺物、遺構共に確認できなかった。一段上の一番北側の調査区は、表上より14～36cm掘り下げた所で茶褐色土層となる。この区域も遺構は確認できなかった。(図15)

遺物は、陶器片2点、不明な鉄製品2点、筒型で中が空洞の銅製品1点が出土している。

調査区の層序は、基本的に上層から、黒褐色土(耕作土)、黒色土、茶褐色土であるが、地点によっては、赤茶色土あるいは礫混茶色土の層が入る所もある。(図11・13・14)

2 石積遺構 (図16)

C-3～12 全長40.3m高さ60～88cm。

北側から中間地点までの長さ18.2m、高さ66～88cmは、根石の50～80cm四方の石を組み、中段に30～40cm四方の石、上段に10～20cm四方の石を組み、その上に40～50cmの土を盛り畦畔とした。ここまではしっかりとした石積であった。中間地点の長さ2.5mほどは、石が抜かれたと思われるため石が少ない。この地点で石の下面が40cmほど上昇する。中間地点より南側は、高さ60cmほどの石積であり、石は10～100cmと大小さまざまで煩雑な石積であった。その上に5～10cmの土を盛り畦畔としている。

3 掘立柱建物址 (図17・20)

掘立柱建物址は2棟近接して確認された。それぞれ石積遺構の西側に南北に並ぶ。D-4～10表面より15～20cm掘り下げた黄褐色土層中において検出した。

(1) 1号掘立柱建物址 (SB1) (図17)

D-4～7に位置し、長軸で11.6m、南北方向に2列検出。短軸は西方向に伸びているが調査区域外に続くので不明。検出面は、黄褐色土層中で礫が多く混在している。東側より1列目の柱穴はP₁～P₆、円形で直径50～100cm深さは10～40cm。東側より2列目の柱穴はP₇～P₈、円形で直径50～60cm深さは30～40cm。2列目の柱列は2ヶ所検出されたのみであるが、本来はあったものと考えられる。

遺物は銭貨1枚、珠洲陶器破片1点、土器片2点が出土している。

(2) 2号掘立柱建物址 (SB2) (図20)

D-9～10南北方向に4.5mで2列検出。柱穴は西側へ続くと思われるが、調査区域外に続くので不明。東側より1列目の柱穴はP₁～P₄、円形で直径20～35cm深さは8～21cm。東側より2列目

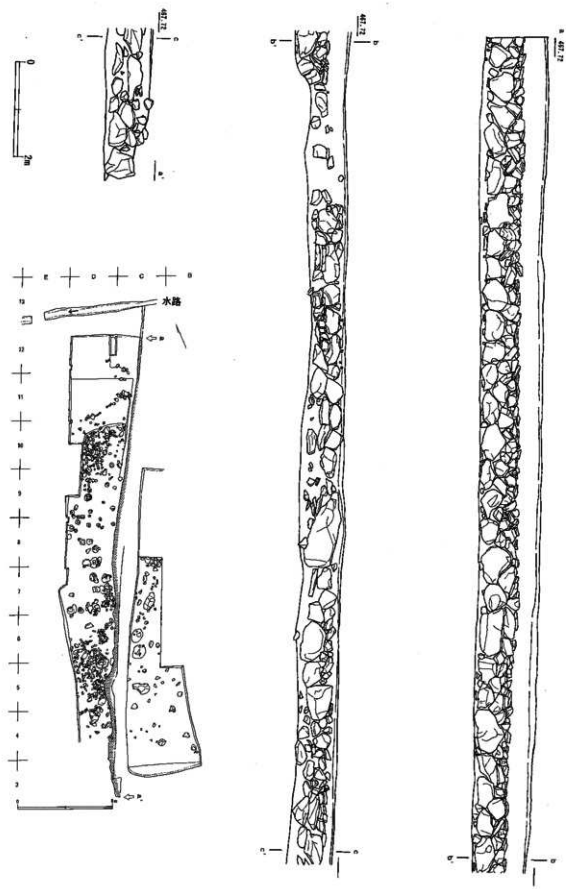


图16 石横立面图 1:80 (1:320)

の柱穴はP₅～P₆、P₅は円形で直径60cm深さは17cm。P₆は方形で径30cm深さは20cm。2列目の柱列は2ヶ所検出されたのみであるが、本来はあったものと考えられる。検出面は、黄褐色土層で北側へいくほど落ち込み、礫が多くなる。

遺物はS B 2の南側1.5mの34×37cmの方形深さ9 cmの柱穴より銭貨3枚、珠洲陶器破片1点出土している。

4 集石遺構 (図21)

G・H-19で検出、2ヶ所とも西側の調査区域外へ続き不明であるが1本につながると思われる。集石遺構1と2では1のほうが2に比べると大きい石の数が多い。

(1) 集石遺構 1

G-19表上より40cm掘り下げた茶褐色土層で検出。長さ3m幅60～72cm深さ10cm。全長は西側の調査区域外まで続くので確認できなかった。20～30cm四方の平らな石を並べ、その周りに10cm前後の小石を敷きつめてある。

(2) 集石遺構 2

H-19表上より30cm掘り下げた茶褐色土層で検出。長さ2.6m幅64cm深さ10cm。全長は西側の調査区域外まで続くので確認できなかった。40×60cm四方の石1個、30cm四方の石2個を並べその周りに10cm前後の小石を敷きつめてある。

遺物は、珠洲陶器小破片2点出土している。

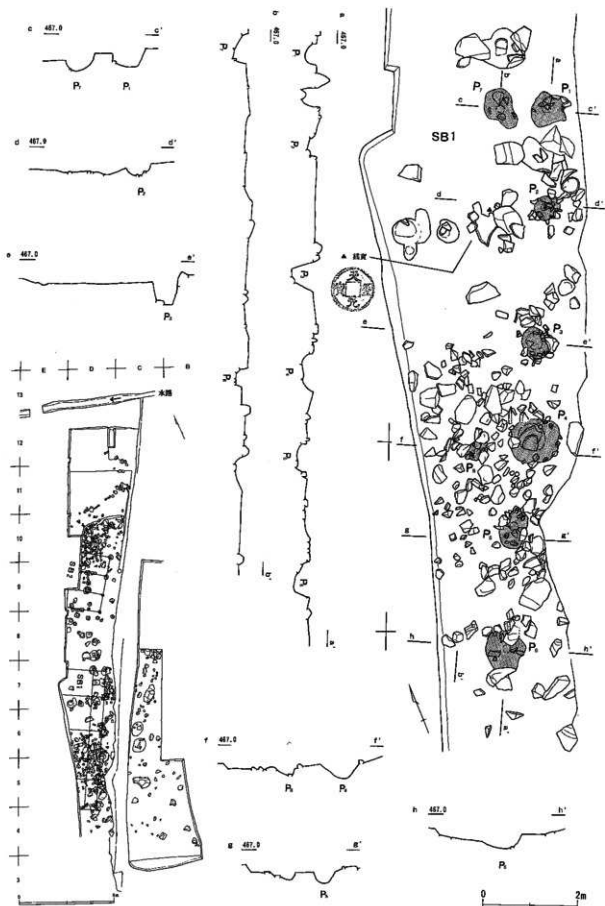


图17 SB1实测图(1) 1:80 (1:320)

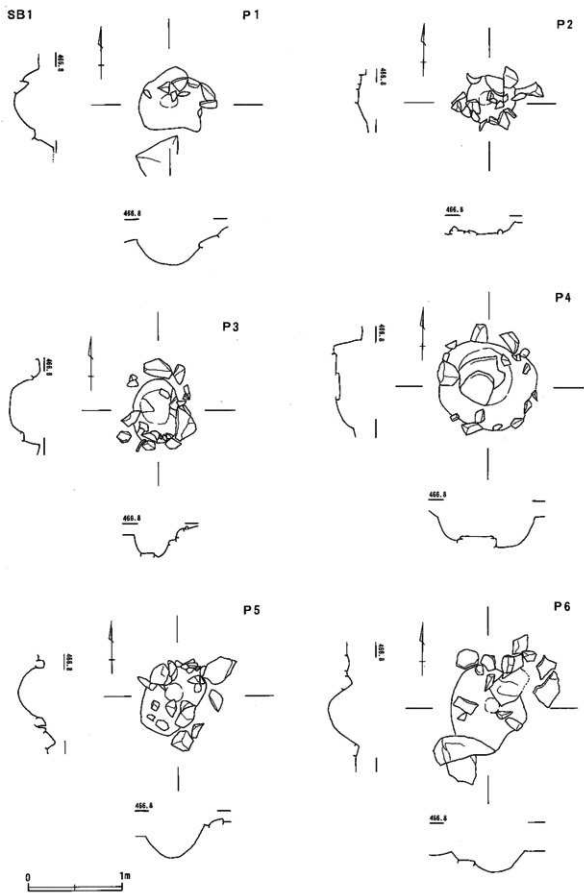


图18 SB1各柱穴实测图(2) 1:40

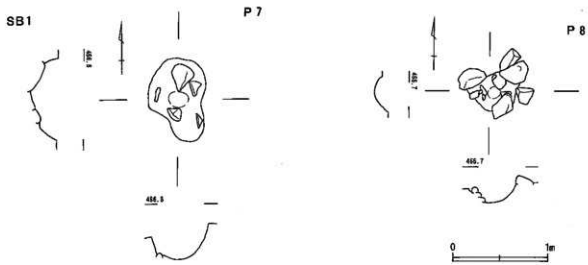


图19 SB1各柱穴实测图(3) 1:40

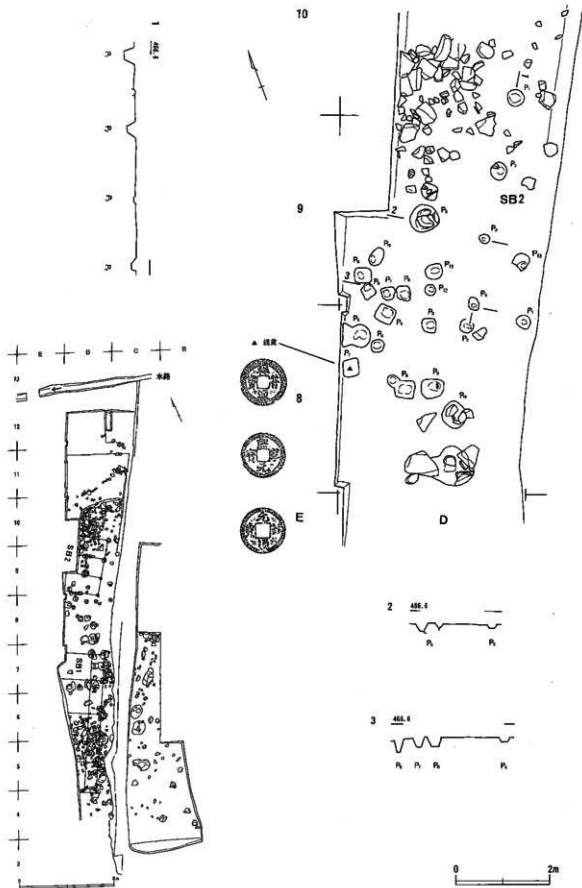


图20 SB2实测图 1:80 (1:320)

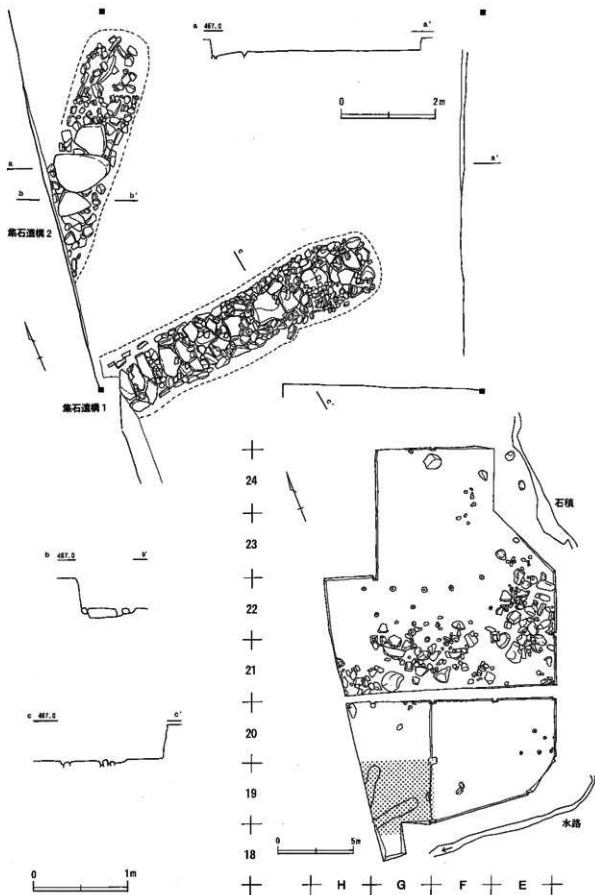


图21 集石遺構圖 1:40 (1:250)

第3節 遺物

今回の調査によって発見された遺物は、遺物整理用コンテナ箱3箱で遺跡の中心地ではなかったこともあり少なかった。

発見された遺物は、土器・陶磁器類として珠洲陶器・カワラケ・肥前磁器・鉄胎陶器等で、鉄・石・銅製品として釘・砥石・輸入銭貨等がある。以下に概略の説明を加える。

1 土器・陶磁器

(1) 珠洲陶器 (図22)

能登半島珠洲郡市周辺において、中世に焼かれた特徴的な陶器である。長野県においては北信地方で多く発見され、特に飯山地方で多く出土する。

今回発見された珠洲陶器は、すべて破片であり全形を伺いえるものはないが、壺・壺・片口鉢の基本三種と呼ばれる種類が出土している。出土地点は概略3箇所に分かれており、グリットではC・D-6・7付近の1号掘立柱建物址、D-11付近の2号掘立柱建物址周辺及びF・G・H-19・20付近の集石遺構周辺である。何れも遺構に関係すると考えられる。

1~11は壺あるいは壺破片である。すべて小破片であり、詳細な時期については不明であるが、7・8などは壺I種と呼ばれる綾杉状の叩き目が施されていることから、概ね珠洲編年IV期ないしはV期(14~15世紀)と考えられる。

片口鉢(14~21、14・17非珠洲陶器)は、内面に卸目の施されたいわゆる摺鉢で、珠洲陶器では「片口鉢」と総称している。口縁のわかる資料の13は、口縁端部が外側に収束するタイプで、21は内面に引き出される形態である。卸目は13が7本一単位であり、21は9本一単位である。破片のため明確ではないが、13例は比較的密に卸目が施されるようである。20は確認できる範囲では卸目が施されていない。時期的には、口縁形態がわかる13・21例から判断すると、13例は細密な卸目や口縁端部の形態から判断すると第Ⅲ期馬繁窯式から第Ⅳ期法住寺第三号窯式期にかけてのものと思われる、概ね14世紀に位置付けられると思われる。21例はやや幅広い歯歯原体の直線卸目や口縁端部の形態から馬繁窯式期の13世紀後半に比定されるのではないかと思われる。

(2) 土器 (図23 1~6)

かわらけ土器である。1はD-7区出土で、底面に回転糸切痕をとどめる。2は内面に煤が付着しており、灯明皿と考えられる。3の底面は凹凸があって明確ではないが、糸切りののち手によるナデ調整が行なわれている。4は底部に回転糸切りののちナデによる調整が行なわれる。5は灯明皿であろう。やや白っぽい色調を呈する。6は器高の浅い土器で、やはり灯明皿であろうか。底部周辺はナデ調整が行なわれている。

以上の土器は、6以外は胎土・焼成も悪い。時期的な予想は難しい。

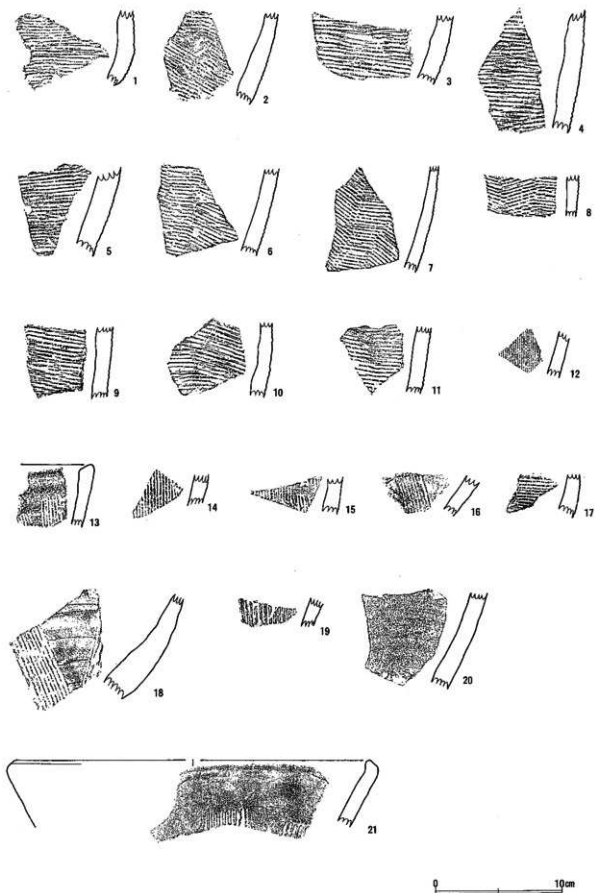


图22 珠洲陶器 (1 : 3)

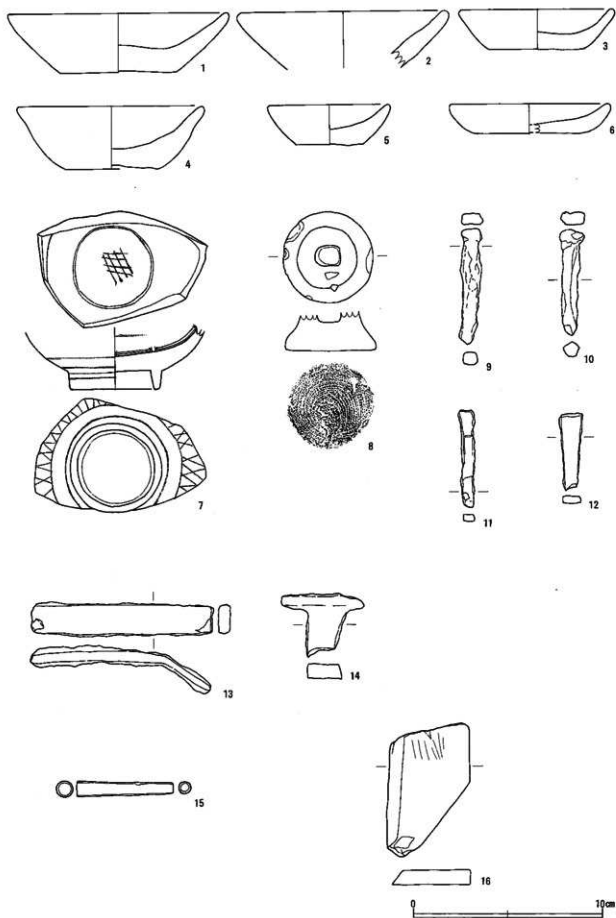


图23 上器・陶磁器・その他の遺物（1：2）

(3) 陶磁器 (図23 7・8)

2点出土している。7はF-27区出土で、肥前系磁器碗である。8はM-27区出土の鉄釉陶器の仏花瓶である。時期的には近世後期の所産と考えられる。

2 その他の遺物

(1) 鉄製品 (図23 9~14)

鉄製品は釘(9~11)のほかは製品名を断定できない。釘は何れも錆が著しいが、3点とも角釘である。

(2) 銅製品 (図23 15)

煙管の雁首である。彫刻等は認められない。

(3) 石製品 (図23 16)

全体の形状を整えてはいないが、表裏面を使用面とした砥石である。C-10区出土。

(4) 銭貨 (図24)

本調査区から4点の輸入銭貨が出土した。詳細は次のとおりである。

	銭名	初铸年(西暦)	直径mm	重さg	出土地区
1	祥符通寶	大中祥符元年(1008)	25	3.1	D-8 ビット
2	天聖元寶	天聖元年(1023)	24	3.0	D-7
3	熙寧元寶	熙寧元年(1068)	24	2.9	D-8 ビット
4	元祐通寶	元祐元年(1086)	25	3.5	D-8 ビット

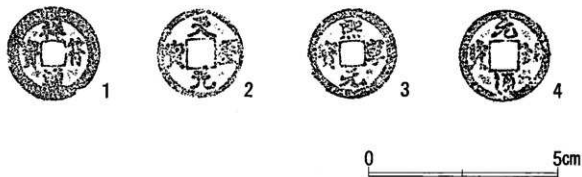


図24 銭貨拓本(1:1)

第4章 ま と め

今回の調査区は、中世に小菅山元隆寺として栄えた小菅修験地の入り口ともいえる場所で、地形的にもその中心地からはやや外れた地域といえる。

それでありながら、いくつかの遺構が確認されその伴出遺物から明らかに中世と断定できる遺物が発見されたことは、ややもすると推定の域を出なかった修験の里小菅の中世が次第に明らかになったことは大きな成果として記録して良い。

今回発見された遺構は、既に水田地帯となっていたためかなりの地形変化が行なわれた場所であった。おそらく、近世になって水田として開墾されていたものと考えられるが、見事な石積み等は数百年も崩れることなく存在していた。そうした開墾により、それ以前の痕跡は不明確となってしまうが、調査区内において掘立柱建物址2棟、集石遺構を検出した。1号掘立柱建物址は、東側が水田化に際して石積みが行なわれたためはっきりしないが、柱列が2通り明確に認められることから建物址と考えて間違いがないと考えられる。柱穴は地山の礫が柱押さえに使用されたためかかなり柱穴に入れられていた。中世遺物が出土しているので当該時期の建物と考えて差支えないであろう。また、2号掘立柱建物址は、旧谷状地で発見されており、急激に黒色土が厚く堆積しているため、遺構を明確に検出することができなかった。しかし、周辺から多くの中世の遺物が出土しており、何らかの建物跡があったと推定している。

集石遺構は2基発見されたが、調査区外に続くためその全形を明らかにすることができなかった。確認し得た部分で推定するに、これら2基はひとつに取束するものと思われる。また、2基のみだけなのかどうか南側にも拡張したが検出できなかった。この構築場所は斜面の高位から低位に向けて2基が取束するようにつくられており、一見集水施設にも見える。しかしながら、中世等においてこうした遺構は管見に接していないので断定は差し控えたい。

小菅修験の調査は始まったばかりである。修験の地の入り口部分が、結果的に道路建設により失われることは痛手であるけれども、小菅集落内の中心部についてはこれからの整備や調査を考え、また将来的な小菅の村づくりにとっても、十分な検討を経て進めなければならぬと考える。

最後に、本調査に関わった作業員の皆さんや、地元小菅の吉原年一區長さんを初めとする小菅区の皆様、また、調査を依頼された長野県飯山建設事務所の皆様にご指導やご協力をいただいた。記して厚く御礼申し上げます。

写真図版



調査対象地発掘前の状況（北東から）



発掘風景（北から）



石積み全形 (北から)



石積み (西から)



家屋前の石積み状況 (南から)



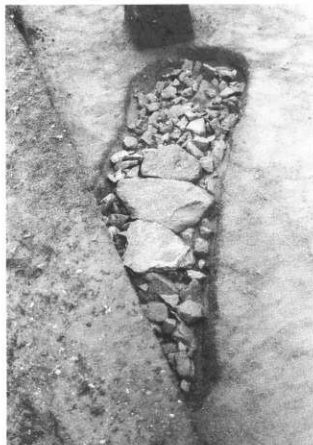
調査区内水路の石積み



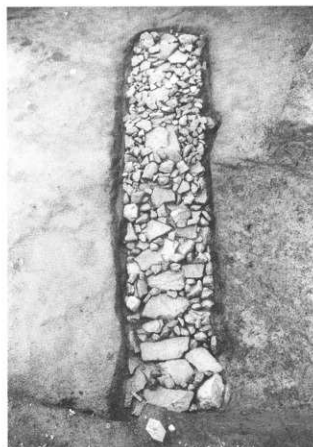
石積み前の1・2号掘立柱建物址（西南から）



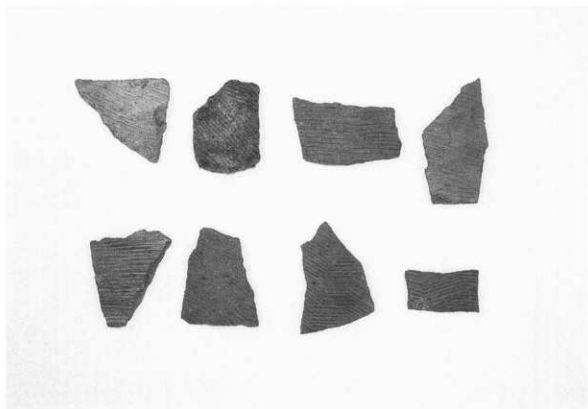
集石遺構全形（東北から）



1号集石遺構 (西南から)



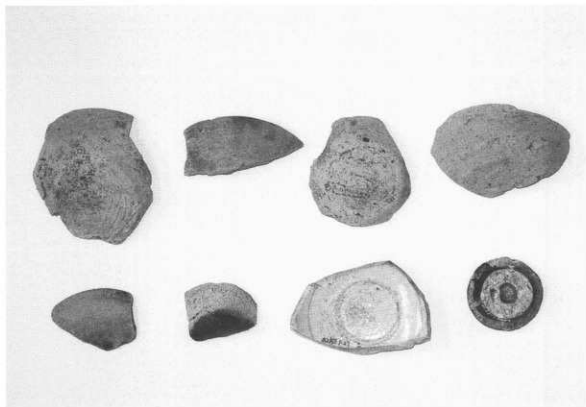
2号集石遺構 (西から)



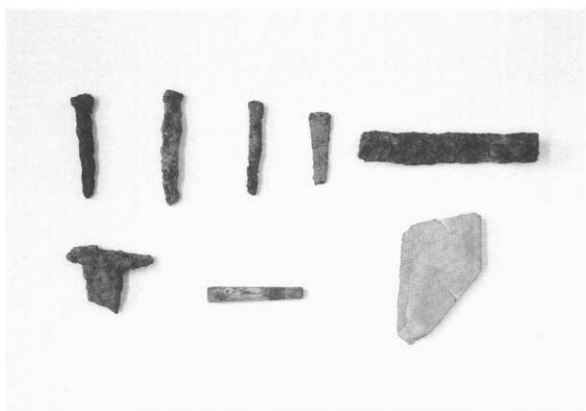
出土遺物 (珠洲陶器壺・甕)



出土遺物 (珠洲陶器片口鉢)



出土遺物 (カワラケ・陶磁器)



出土遺物 (鉄・銅・石製品)

報告書抄録

ふりがな	こすげしゅげんいせき 2003							
書名	小菅修験遺跡 2003							
副書名								
巻次								
シリーズ名	飯山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第68集							
編著者名	岡田良幸・望月静雄							
編集機関	飯山市教育委員会							
所在地	〒389-2292 長野県飯山市飯山1110-1 Ⅱ0269 (62) 3111 内線366							
発行年月日	平成15年3月13日							
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小菅修験遺跡	長野県飯山市大字瑞穂 6523番地	20213	319	36° 53' 30"	138° 25' 23"	20030606 / 20030723	960㎡	道路建設に伴う調査
所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小菅修験遺跡		中・近世	掘立柱建物址2集石遺構	珠洲陶器・カワラケ・陶磁器				

飯山市埋蔵文化財調査報告 第68集

小菅修験遺跡 2003

発行者 長野県飯山市大字飯山1110-1
飯山市教育委員会
Ⅱ0269-62-3111

発行日 平成15年3月13日

編集者 飯山市教育委員会

印刷所 ほおずき書籍館

